



## 第4回タイ研究国際会議

(1990年5月11日～13日)

綾部恒雄\*

1990年5月11日から13日まで、中国雲南省昆明市の連雲賓館 (Lianyun Hotel) において、雲南省社会科学院東南アジア研究所 (代表者 陳呂範教授) 主催の、第4回タイ研究国際会議 (The 4th International Conference on Thai Studies) が開催された。外国からの会議参加者の宿舎には翠湖賓館が充てられた。この会議は1981年の第1回会議 (インド, ニューデリー), 1984年の第2回会議 (タイ, バンコック), 1987年の第3回会議 (オーストラリア, カンベラ) につづくもので、今回の会議については、トヨタ財団, バンコック銀行, フォード財団からの財政的援助があったといわれる。

大会事務局に事前に登録した参加予定者は467名にのぼったが、このうち約350名前後が実際に参加したといわれている。タイ国からの参加者が一番多く200名を越えたものと思われる。このためバンコックからチェンマイ経由のチャーター便が用意された。天安門事件の余波が残っており、欧米の学者の中には、抗議の意志を表明するために、会議参加を見合わせた人もいたとのことであった。日本からの出席者は白鳥芳郎, 北原 淳, 馬場雄司, 加藤久美子及び綾部恒雄の5名である。国籍別参加者は、タイ国人及び現地の中国人を除くとやはりアメリカ人が多く、20名前後の規模だったと思われる。また、アッサムのアホーム族出身の参加者が10名みられたのが注目されていた。

第1日目の開会式にはタイ国のカラヤニー・ワッタナー王女 (Princess Kalyani Vadhana) が出席され、開会の辞をのべられた。また雲南省知事の祝事も披露された。登録された研究発表は全体で117件であるが、プログラム印刷の締切に間に合わなかった人の飛び入りの発表もあり多少の混乱がみられた。したがって会議の proceedings は2巻配

布されたが、収録できなかったものを含めて、近日中に第3巻が発刊される筈である。

会議での報告は、予定では下記のように6つのトピックスに分けられていた。

1. タイ国の歴史と文化
2. 民族学と人類学
3. タイ経済の発展
4. タイ国の政治と国際政治
5. 中国とタイ国
6. その他 (女性研究を含む)

しかし、実際には必ずしもこうした分類では報告が進行しなかったようである。3日間の会議の各セッションの中で、注目を浴びた報告を幾つか選んで、発表者名と発表テーマのみを次に紹介する。

Huang Huikun. A Research on Ancient "Siam-Dai" Kingdoms.

Chen Lufan. On the Origin of Thai Race.

Amana Prasithratsint. A Comparative Study of the Thai and Zhuang Kinship System.

Gao Lishi. The Nomenclature of the Dais in Xishuangbanna and Its Social Meaning.

Sachchidanand Sahai. Remoulding of Soul: Investigation into a Tai Belief System.

Porntipha Bantomsin. The Impact of Early Buddhism on Thai Monarchy.

Amphay Doré. Did the Tai People Contribute to the Foundation of the Nanzhao Kingdom?: Some Chronological Elements.

Sumon Amornvivat. Patterns of Child Rearing Practices: An Ethnographic Study in Thai Villages.

Paitoon Mikusol. Education and Socio-cultural Assimilation in Northeastern Thailand.

J.N. Phukan. The Ahom: The Early Tai of Assam and Their Historical Relations with

\* Tsuneo Ayabe, Institute of History and Anthropology, University of Tsukuba, Tsukuba City, Ibaragi 305, Japan

- Yunnan.
- Ma Xiaojun. The Comparative Research on Reform in Japan and Siam in the Late 19 Century.
- Piyanart Bunnag. Kinship and Patron-Client System in Thai Politics during the Early Ratanakosin Period.
- He Ping. Slaves and Slavery in the History of Thailand.
- He Yaohua. On the Change of the Land Ownership of the Dai Mannors in Xishu-angbanna.
- Zhang Xisheng. The Feudal Law and Power Structure of the Dai Nationality in the Dehong Religion.
- Chintana Bunbongkan. Thai Woman Executive.
- Suchitra Chongstitvatana. Women in Thai Literary World.
- Chen Jianming. The Changes of the Chinese Society in Thailand after the Second World War.
- H. Peters. Buddhism and Ethnicity Among the Tai Lu in the Sipsong Panna.
- Hu Yuefang. The Sources of the Cardinal Numerals in the Dai Language.
- Sunthorn Na-Rangsi. Vietnamese and Chinese Sects of Mahayana Buddhism in Thailand: History and Development.
- Jitlada Sirirat. Women Roles in Country Development during the Reigns of King Rama IV and King Rama V.
- Richard Basham. Ethnicity and Worldview in Chiang Mai, Thailand.
- Leshan Tan. From Opposition to Syncretism: A Preliminary Analysis of Tai Lue Religion.

各セッションにおける聴衆の数から判断すると、

タイ人研究者の間では、タイ族の起源・歴史、南詔国問題についての関心が特に高かったようである。これはタイ国からの参加者が、文学、言語学、歴史学など人文科学分野の人が多く、経済学、政治学、社会学など社会科学分野の研究者の参加が少なかったこととも関連があろう。

会議終了後8方面へのエクスカージョンの計画があったが、参加者の数その他の都合によって、この中の3つがキャンセルされた。筆者はシップソンパナ(西双版纳)方面へのグループに参加し、5月14日～18日の間、景洪市を中心として、周囲の少数民族の見学を行なった。景洪は昆明の西南、飛行機で約40分の地にある。景洪周辺には西双版纳自治州のタイ族をはじめとして、約15種の少数民族が分布しており、民族学的研究の宝庫ともいべきところである。景洪東部山中の仏教徒モン族の大集落を訪れた時には、タイ国ランブリ近郊及び北タイのランブーン周辺のモン族との関連を想い強く惹かれるものがあつた。また、景洪では中国政府のはからいによって、1981年に設置された「西双版纳傣族自治州民族中学」をも参観した。13クラス、589名の生徒が登録しており、タイ族の他、クム族、ハニ族、メオ族、ヤオ族などの子弟が混じって勉強している。英語の授業も参観したが、授業内容は他の中国人の中学と変わらないということであつた。校長はタイ族出身者である。

以上、第4回タイ研究国際会議及び会議後の旅行についてその概略を紹介した。天安門事件後に行われた国際会議でもあり、幾つかの困難が予想されたが、中国政府も最大限の気配りをもって臨んだことが窺われる。会場案内の混乱や飛行機便の予定外のキャンセルなど、社会主義圏にありがちな非能率もみられたが、全体として成功裡に終わった国際会議だつたと考えてよいであらう。

第5回会議はバンコック、第6回会議は韓国のソウルで開催される予定である。

(筑波大学歴史人類学系教授)